



悲しき黒帯



山口大学教育学部 准教授

上地広昭 (うえち ひろあき)

早稲田大学大学院人間科学研究科博士課程修了。沖縄上地流空手道三段。専門は健康心理学、健康行動科学。著書は『運動と健康の心理学(朝倉実践心理学講座9)』(分担執筆、朝倉書店)など。

ブルース・リーの転生

1973年、ブルース・リーが逝去しました。その年の11月27日、私は生まれました。その日は奇しくもブルース・リーの誕生日でした。実は、今でも、飲み会の席で「自分はブルース・リーの生まれ変わりだ」と吹聴することがあります。彼は映画俳優として有名でしたが、その他にも截拳道(ジークンドー)という独自の格闘技を創始したり、ワシントン大学で哲学を学んだりと非常に多才な人物だったそうです。強い者への憧れが人一倍強かった幼少期、ブルース・リーは私にとってヒーローでした。

吾十有五にして空手に志す

そんな私は、親のすすめもあり幼稚園の頃から柔道の町道場に通い、十五歳の時に空手を始めました。空手は「上地流(うえちりゅう)」という流派を修業し、いまでも山口大学で体育心理学のほかに実技科目としてこの上地流空手を教えています。自分の名前と同じこの流派を名乗ると、必ず「実家が空手道場なんですか?」「我流なんですか?」と尋ねられます。しかし、これはたまたまです。私のルーツが沖縄で、「上地」という姓は沖縄ではそれほど珍しいものではありません。上地流は開祖上地完文がいまから一世紀ほど前に沖縄から中国に渡って拳法を修業し、日本に持ち帰って作った流派です。今では、剛柔流、小林流と並び沖縄三大流派と呼ばれるほどメジャーな流派になっています。

空手は文化

十五歳で空手を始めてから現在に至るまで、多少のブランクはあるものの四半世紀以上空手を続けています。試合の勝ち負けを楽しむスポーツとしての空手もよいのですが、それ以上に文化としての空手に魅力を感じています。空手にはメジャーなものだけでも数十種類の流派があり、流派それぞれに独自の歴史、技術体系があります。俊敏さを活かした遠間での攻防を得意とする流派もあれば、被弾することを前提に剛健な体を作り上げての接近戦に長けた流派もあります。流派による特色は、その流派が生まれた土地(琉球王朝時代の首里、那覇、泊など)や普及した社会階層(王族、士族、庶民など)の違いに依拠します。それぞれの流派の特徴を熟知すると、カンフー映画や時代劇がよくある、相手の構え(腰の高さや引き手の位置)を一瞥しただけで「むっ! ○○流だな!？」と看破できるようになりマニアックな愉悅に浸ることができます。

実存は本質に先立たない

ただ、今はスポーツとしての空手が全盛で各流派の特色もかなり薄くなってきています。スポーツは同じルールの中で勝つための戦略を練るわけですからスタイルが似てきて当然といえます。私も、若い時は、スポーツとしての空手に熱中しましたが、今はスポーツではなく武芸として空手に取り組んでいます。師匠から受け継いだ「型(もしくは形)」を正しく

継承していくことが武芸であり、それは能や歌舞伎などの伝統芸能とよく似ています。能や歌舞伎で「この喋り方のほうが声の通りがよく、お客さんに聞こえやすいから」とか「この動きはもっと大きくした方が遠くのお客さんにまで見えるから」とむやみに発声法や所作を変えることはありません。只々、先代から受け継いだ型を愚直なまでに忠実に模倣するだけです。空手も同じです。スポーツとしての空手の試合に勝つためには、構えも突き方も本来の型から離れ、ルールの中で最も効率的にポイントが取れるように調整し直さなければなりません。しかし、それでは、型ではなくルールが空手の本質になってしまいます。空手の本質は型であり、その型から大きく逸脱してしまったものはもはや空手と呼ぶことはできません。

この本質の揺らぎの問題は、いまの大学の研究者のあり方についてもいえるのではないのでしょうか。現在、経済至上主義に基づく実学偏重や競争的資金獲得による順位づけなど研究者を取り巻く環境はひときわ厳しいものになっています。しかし、研究者の本質から乖離してはならないはずです。私は研究者の端くれとして、そのときどきの時代のニーズ(ルール)に合わせて研究姿勢を変えるのではなく、恩師をはじめ多くの先達から教えていただいた研究者として真理を追求する姿勢(本質)を大切にしながら今後も研鑽してゆきたいと考えています。